

NAGOYA Ocean Times

～子ども記者が海の情報を体験・発信～

号外



名古屋港で“海”を体験

七月二十三日から二十五日の三日間、名古屋の海に関する新聞社「ナゴヤオーシャンタイムズ」社で記者体験ができるイベントが開かれた。これは、子どもたちを中心に海への関心や好奇心を喚起し、海の問題解決に向けたアクションの輪

を広げ、ことを目的に日本財団や政府の旗振りのもと、オールジャパンで推進する「海と日本プロジェクト」の一環。二十五日は、愛知県内各地から五十二人の小学生が集まり、名古屋港ポータルビル会議室で「中日新聞社」の辻さんから新聞

記者の仕事についてのオリエンテーションを受けた。後、名古屋港水族館で「海のお仕事」を、名古屋海洋博物館で「海のお仕事」について学んだ。

名古屋港水族館では、飼育展示部飼育第一課の伊藤さんと飼育展示部学習交流課の市川さん案内のもと、飼育員の仕事を座学で学び、約三万五千匹のマイワシ群が泳ぐ黒潮水槽のバックヤードや多種多様なクラゲが泳ぐクラゲアクアリウム、カラルな魚類を集めた特別展「カラル」などを見学。黒潮水槽のバックヤードでは、マイワシへの餌やりなど普段はできない貴重な体験をしたことで、見学後の質疑応答では積極的に質問が飛び交い、海の仕事や海洋生物についての知識を深めた。

名古屋海洋博物館では「大人も知らない名古屋港の秘密」を特別にプロがレクチャーをテーマに、名古屋海洋博物館学芸員の加藤さんが子ども記者を率い、防災特別展「防潮扉や高潮防波堤、六十年前に起きた伊勢湾台風被害の様子」を示したジオラマを見学し、名古屋



展示水槽のバックヤードでイワシに餌を与える子ども記者たち=名古屋港水族館で

屋港の防災について学んだ。また、様々な展示で名古屋の歴史や日本一の国際貿易港であることを知り、操船シミュレーターでは港の臨場感をたっぷり体験。こうして見て聞いて体験すること、名古屋港は自慢の港だ。名古屋港って実はすごいところだった。「名古屋港があるから名古屋の人たちは守られている」と港の大切さを実感した子ども記者も多かった。こうして一日をかけて「海のお仕事」と「海のお仕事」について体験取材をした子ども記者は、満足した様子で名古屋港ポータルビル会議室へ向かい、取材した内容をまとめるため原稿用紙に向かった。子ども記者たちがみんなに知らせたいと感じた内容は、「子ども記者取材記」を確認してほしい。



上 伊勢湾台風の被害ジオラマを見学し名古屋海洋博物館で名古屋港水族館で海洋生物について学習する様子。
中 名古屋港水族館でイワシに餌を与える様子。
下 質疑応答の時間ではたくさんの意見が飛び交った。

海のお仕事とそなえを伝える

子ども記者取材記

私たちが、安心してくらせるのは、名古屋港のおかげでもあります。なごやは荷物が、一番多いんです。外国に自動車や荷物を運び、売るとお金がはいって、そのことをくろじと言います。お金があまりはいらないのは、あかじと言います。そして明治に、おそろしい台風がきました。その台風には4697人が

海と人と名古屋港をつなぐ

の人が亡くなりました。その台風の名前は伊勢湾台風です。ところどころに所もありました。もう二度とこんなことがおきないように、願っています。伊勢湾台風がきたように、来ないとはかぎりません。これからも安全のため、人と人とのきょうりよくで、町をより安全にしましょう。



参加者は三年生が十六人、四年生が十八人、五年生が九人、六年生が九人の計五十二人。